入選

わかってくれる人

奈良県　山添中学校
３年　中田絢心

強がっているけれど、実は繊細。明るく見せているけれど、実は超ネガティブ。結構な負けず嫌い。それが私。中学３年、１５歳。言いたいこと、言葉にしなくても分かってほしいお年頃。そんな私のことをわかってくれる人なんて、いないと思っていた。

中学２年生の夏、私にあるできごとが起こった。それはそれは、心が折れてしまうようなことだった。毎日毎日不安だった。周りの人たちが信じられなくなって、誰を信じたらいいのかも分からなくなって、私の心は不安と孤独感でいっぱいだった。

「どうして私が。」

友達だと思っていたのは、自分だけだったんじゃないか。本当はみんな私のことが嫌いで、憎んでいる人がいるんじゃないか。そんなことばかり考えた。みんな敵に見えた。どうせ私のことなんて。そう考えることが多くなった。まるで光の届かない暗闇に、たった１人で閉じ込められているような気分だった。

だけど、私の周りには優しい人たちがたくさんいた。私に寄り添ってくれた家族、大人がいた。私の不安を、受け止めてくれた友達がいた。私の代わりに怒ったり、泣いたりしてくれた人がいた。そんな優しい人たちに、私は支えられていた。今も昔もずっと。

今まで気がつかなかっただけで、数えきれないほどの優しさを、温かさをもらっていたのだ。当たり前にそばにいてくれる家族。いっしょに笑ったり、怒ったりしてくれる友達。いつでも相談に乗って、助けてくれる先生。改めて思えば、私の生活はたくさんの人の優しさの上にあるのだ。誰も私のことなんてわかってくれない。そんなことを思う私のことも支えてくれる、わかろうとしてくれる人がいたのだ。気がつかなかっただけで、どんなときも私の周りは誰かを想う優しさで溢れている。

今、この世界が平和かと聞かれたら、そうではない。少なくとも日本は平和だと言えるかもしれないが、戦争や殺人、事故などでたくさんの命が失われている。そんな世界でも、辛いことばかりではない。生きていれば、嬉しいことや楽しいことはたくさんあるはずだ。限りある人生の中で、人はたくさんの優しさに触れるだろう。

私が辛いとき、支えてくれた家族のように。寄り添ってくれた大人のように。受け止めてくれた友達のように。ほんの些細（ささい）な、小さな親切で、人はより強くなれる。優しくなれる。たとえ周りが気づかないようなことだったとしても、それが誰かのためになる。私はそうありたい。誰かを助けられるような強く優しい人になりたい。

この世界が小さな親切で溢れることを願って。